

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Greetings of the Fulbe of Northern Cameroon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004239">https://doi.org/10.15021/00004239</a>

## カメルーン北部・フルベ族の挨拶の言語表現

江 口 一 久\*

### Greetings of the Fulbe of Northern Cameroon

Paul K. EGUCHI

The purpose of this paper is to report Fulbe greetings heard in Diamare, Northern Cameroon, focusing the description on the formulaic expressions and non-verbal elements which accompany verbal expressions.

First, the motive of greetings is explained in terms of the sense of shame (*semteende*), and other components of Fulbeness (*pulaaku*).

In the highly hierarchized Fulbe society social inferiors initiate greetings to superiors. The main factors which determine the hierarchy are: age, lineage, gender, Islamic activity, and wealth.

Greetings are exchanged in various places, such as the front of the house, vestibule, shaded area, room, and so on. The place of greeting is an indicator of the degree of intimacy between the two speakers. The more private the space, the more intimate is the relationship between two speakers.

In principle greetings are exchanged by two speakers. The greetings are chosen according to time, climate, space, length of time since the last meeting of the speakers, and the relationship between the speakers.

Greeting behavior is considered to be ritual, because people repeat the same procedure, and the greetings are formulaic. Even if one exchanges news in greetings, the responses do not necessarily reflect reality. They say only *jam* 'peace', even if they actually have troubles. Real news is exchanged after the greetings.

An ordinary greeting consists of four phases: 1) introductory phase, which begins with meeting and blessing each other, 2) ex-

---

\* 国立民族学博物館第3研究部

**Key Words** : Fulbe, greeting, West Africa, formula, *jam*  
キーワード : フルベ族, 挨拶, 西アフリカ, 定型句, ジャム (*jam*)

change of news, 3) leave-taking, and 4) blessing each other. *Assalaamu aleykum* opens the introductory part. Allah's blessings follow the introduction. One asks the *jam* of the counterpart. Always *jam* is included in the answer. When one expresses leave-taking, both of them bless each other.

Since the Fulbe have been living with other ethnic groups for a long time in Western Sudan, they have borrowed many greeting expressions from other ethnic groups. The verbs *hoofn-* and *saan-*, meaning 'to greet' in Fulfulde of northern Cameroon, are possibly derived from Zerma and Hausa respectively.

0. はじめに	5.1. であい頭から相手の祝福にいたる部分
1. フルベ族の社会の伝統的考え方や挨拶行動	5.1.1. 「アッサラーム・アレイクム」
2. だれがだれに挨拶をはじめるか	5.1.2. 相手に接近するときの「アッサラーム・アレイクム」
2.1. 年齢, 世代差による上下関係	5.1.3. 仕事をしている人に接近するときのことば
2.2. 男性と女性	5.1.4. であい頭の祝福
2.3. 支配者と非支配者	5.2. 儀礼的ニュースの交換
2.4. イスラム教における上下関係	5.2.1. 相手自身, 相手の家族, などの平安に関する問い
2.5. 貧富の差	5.2.2. 時にあわせた挨拶
2.6. 現地の人と外来者	5.3. 別れの文句
3. どこで挨拶をするか	5.4. 別れ際の相手の祝福
3.1. 「門前 (yolnde)」	6. 挨拶表現のことば遊び
3.2. 出入口の小屋 (zawleeru)	7. おわりに
3.3. 日除け (danki)	7.1. 借用語と異部族との共生
3.4. 居室 (suudu)	7.2. 社会変化と挨拶
4. 挨拶の距離と身ぶり	7.3. キネシクスの可能性
4.1. 挨拶する両者の関係の上下	
4.2. 身ぶりとしぐさ	
5. 挨拶の言語表現	

## 0. はじめに

挨拶というものは、さりげなくかわさているようであっても、その形式、性質、機能、その象徴性などについては、さまざまな議論をよぶもので、そう簡単にあつかえるたぐいのものではない [GOFFMANN 1967; LAVER 1981; GOODY 1972; FIRTH

1972]。

挨拶は、社会生活を円滑におこなっていくために、たいせつなエチケットの一つである。エチケットの基本は、適当なときに、適当な行動をとり、相手の礼を損なわないということである。

挨拶を贈与とのアナロジーで考えることもできる。なぜなら、直接的、間接的に、相手にたいする挨拶には、返礼が期待されているからである。強者の庇護をうけなくてはならない、社会的弱者にとっては、身分のうえのものにたいする挨拶の返礼に、生活がかかっていることもある。

挨拶は、口からでることだけでなく、目、頭、手、足、胴体などの身体の動き、着ている服装などをもってあらわされる。だから、挨拶行動全体の研究は、たいへん広範囲にわたる。

高度に通信の発達した有文字社会では、対面してかわす以外の挨拶があるが、無文字社会においては、大部分の挨拶は、対面による挨拶である。

本稿では、東方方言をはなすカメルーン北部のフルベ族の挨拶行動のうち、対面による、二者のであいのときと別れのときにかわされる紋切り型の言語表現を中心とするものにかぎり、記述考察をおこないたいとおもう。なお、本稿のもとになる資料は、すべて筆者の1969年から1992年までにわたる、東方方言のはなされるディアマレ地方の最大の街マルアを中心とする民族学的参与調査、ききとりなどにもとづく。

本論にはいるまえに、フルベ族の挨拶に関する先行研究とその問題点についてのべておこう。

フルベ族の挨拶についていままで唯一といえる論文を書いた、ラバチュは、フルベ族の挨拶を、序言、すなわち、もてなしのとき、中心的な部分、すなわち、ニュースの交換、結論、すなわち、いとまごいの三部分にわけて、マリ、ニジェール、カメルーンの諸方言の例をあげて考察し、フルベ族の挨拶は、宗教的にも、社会的にも、心理的にも、生命的行為であると結論づけている [LABATUT 1989]。本稿では、ラバチュによる挨拶の三部分の考え方を基本的には継承しフルフルデ語の挨拶に関するタクソノミーについて吟味し、北部カメルーンの東方方言における挨拶の言語表現の記述を試みた。しかしながら、ラバチュの論文は、その発想はおもしろいが、どの方言圏に

1) カメルーン北部のフルフルデ語は、おおきく分けると、マルアを中心とするディアマレ方言 (fuunaangeere) と、ガルアとガウンデレを中心としてはなされている西方方言 (hiirnaangeere) の二つがある。前者は、伝統的な形を維持している方言と考えられている。前者の話手たちによると、後者は、たいへん崩れた形をしていると考えられている。なお、後者は、ナイジェリアのヨーラでもはなされている。

においても、精密な記述にもとづく資料をもっていなかったので、各方言からの例を恣意的に論文にちりばめるだけになってしまっている。

アーノット [ARNOTT 1971] は、西方方言のはなされる地域の西のゴンベ地方のイブラヒーム・ジャッロ・ワジリによって書かれた、学校に子どもをあずけようとする父親とコーラン学校の先生との会話の例に詳しい注をつけており、そのなかにくつつかの挨拶例がでてくる。この挨拶は、形態的に複雑で、本稿の例によく似ているが、この論文から、ゴンベ地方の挨拶の全体を知ることはできない。

西方方言よりずっと西のソコト (Sokoto) 方言を記述した、ヴェステルマン [WESTERMANN 1909] と西方方言をあつかったクリンゲンヘーベン [KLINGENHEBEN 1963] はともに、現地をふまらずして、インフォーマントを使って研究をおこない、文法書を書き、そのなかで、挨拶について簡単に述べているにすぎず、その内容は、とぼしい。

ノワ [NOYE 1974] は、テイラー [TAYLOR 1953] の記述を参考にし、東方方言の挨拶の言語表現の紋切り型 (formules) を実用目的のためにその簡単な使用条件とともに記述している。

本稿では、ノワ、テイラー、ステンネス [STENNESS 1969] のとりあげなかった、不十分ではあっても、非言語的要素について紙面をさいたばかりではなく、紋切り型の例の充実をはかり、挨拶についての民族学的記述の枠組みをつくったが、各地方における挨拶の体系は、これからの課題である。

## 1. フルベ族の社会の伝統的考え方と挨拶行動

カメルーン北部のフルベ族は、礼儀正しさ (ladabu), 忍耐強さ (munyal), 恥 (semteende), 人間らしさ (neddaaku), 立派さ (daraja), イスラム教徒らしさ (juulndamku), 勇敢さ (ngoru), 愛 (end'am), もの惜しみをしないこと (caahu), 自由 (ndimaaku) などの要素などによって構成されている, 「フルべらしさ (pulaaku)」という考え方をもつ (VerEecke [1988] 参照)。

挨拶をするということは、これらのすべての観点から「フルべらしさ」を満足すべく、かつ、それが「道にかなったこと (doole)」として、おこなわれていると考えられる。

エチケットをしての挨拶は、ladabu という考えからおこなわれる。ladabu には、礼儀、丁寧さ、遠慮、遠回しの表現などの意味をもつ。ladabu には、ことば遣いだ

けでなく、身の動かしがた、しぐさ、目のおきば、相手と距離をとることなどによって、表現される。だから、ladabu は、相手の「顔」にプラスの働きをすると考えられる。

こちらが、ladabu にしたがうために、身を低くして、相手をひたすら高めるときに起こる不満な気持ちは、忍耐強さ (munyal) でもって堪え忍ばれる。したがって、モラルのために、munyal は、適当なコントロールをあたえているともいえる。かれらの忍耐の限界は、相手の母親に関する悪態を口にするところでおわるということになっている。これが、フルベらしさの一つになっていることは、かれらが、多くの異民族のなかで生活してきたこととも関係があるだろう。

フルベ族は、自分の感情を直接あらわすことは、恥ずかしいことと考えており、相手との直接の衝突をきらう。だから、相手とは、意見があわなかったり、きらっていても、相手にそのような感情を直接あらわさないのが普通である。ディアマレ方言では、腹のなかでおもっていることを、直接、口や顔色にあらわさないことを、Yillagaaku とよぶ<sup>2)</sup>。このような理由からも、フルベ族の挨拶もたいへん儀礼的なものであるということがわかる。

semteende は、自分が相手より身分が低いなら、自分から挨拶をしないといけないし、自分が相手より身分が高いなら、相手から挨拶をされないと、相手と自分の身分関係の肯定がなされていないわけなので、内心こころおだやかならない気持ちを起こさせる。この semteende は、挨拶行動のモチベーションという意味から、他の要素よりもずっと重要であると考えてよい。人々は、自分の顔を失わないように行動するし、相手の顔をたてるように注意をはらう。顔を失ったら、たいへん恥ずかしい (cemtudum) ことになる。ここで、注意しておきたいことは、実際には、相手をどうおもっているかよりも、習慣上要求されている、儀礼的挨拶行動を相手に対してとらないことが、恥ずかしいことなのだ。通過儀礼などにおいては、第三者の目も気にしなくてはならない。葬式のおりなど、お悔やみにいかなければ相手とそこにいる家族、町内、村内などの人々に恥ずかしいという理由ででかけていくことが、はなはだ多い。

また、同じような理由で、人々は、いかにして、相手に卑しめられないように、人々に接するかを考える。だから、たとえ、屋敷内で工作中、上半身が裸であっても、外出のときに、できるだけ着飾っていこうとしたり、伝統的首長 (laamiido, laamdo)

2) Yillaga とは、氏族名で、とくにこの氏族は、感情を表にあらわさないとされているからである。

や、地方長官などの前にでるときには、人々は、もっともよい着物をきてでかけるのもそのためだ。

今日、フルベ族の社会には、王 (laamdo, laamiido) がいて、王は、一般人よりも身分が高いことになっている。しかしながら、かれらのうちには、自由人のフルベ族は、自由であるという気持ちをひめており、自由人のあいだでは、おたがい対等にあつかうこと、すなわち、人間らしさ (neddaaku) が、大切にされる。これは、イスラム教徒のあいだにある、おたがいの平等観ともつながりがある。おそらく、このイスラムの伝統とあいまって、人間らしくあつかわれることを期待している。もしこれが、守られないならば、あるいは、挑戦をうけると、伝統的には、しばしば、死ぬことをもおそれないで、勇敢にたたかうことが、期待されている。

目上の人、第三者のみで見ているところで適当な挨拶をうけることは、光栄なこと (daraja) である。この挨拶にたいしては、贈り物 (gooro<「コーラの核」)、施しもの (sadaka<アラビア語 sadaqa<ヘブライ語 šdaqah) などの形で返礼することが、期待されている。このとき、だし惜しみをしない (caahu) のが、フルベらしさのよいところと考えられている。これは、一般の人々のあいだでも、おなじことである。

## 2. だれがだれに挨拶をはじめるか

一般に、目下のものが、目上のものに、あるいは、身分が低いものが、高いものに、社会的ヒエラルキーの低いものから、高いものに、挨拶をはじめることになっている。

また、伝統的首長などが、グリオ (bammaaado/wammaaabe) などの口をとおして一般人に、あるいは、グリオが、聴衆に、「わたしは、みなさんに挨拶しています (Mi saani on fuu)」というばあい、この挨拶は、一対多である。また、数人が同時に、伝統的首長などの高位にあるものに、挨拶することがある。これは、多対一ともいえる。しかしながら、このようなことは、いわば例外で、普通、挨拶は、相手の面前で一対一でおこなわれる。

二人の話者の上下関係を決定するのに重要な役割をはたす、年齢、世代、イスラム教、社会階層、性別、貧富の差など上下関係を決定する要素の内容をみてみよう。

実際には、これらの要素がからみあっているのと、本人の意図次第でどちらがききに挨拶をはじめるとかは、予測がつきにくいばあいが多くある。

## 2.1. 年齢、世代差による上下関係

親族内では、冗談関係 (*dendootirgo*) がある交差イトコ (*dendirawo/dendirabe*) のあいだ以外は、年齢のうえのもの、うえの世代にあるものには、話者は、相手を、その名でよびつけにすることができない。かれは、相手を自分にとってだれに当たるかということをしめす尊称 (*soomoore*)、あるいは、タイトル名といえるもので相手をよばなければならない。逆に、話者は、自分より年齢の低い、したの世代にある人には、その名でよびつけにすることができる。よびつけにされる人は、よびつけをする人の目下であるということができる。

たとえば、ある人の名前が、*Hammadu* である場合、その父親は、自分の子どもを *Hammadu* とよび、*Hammadu* は、自分の父親を、*baaba*「父」とよぶ。

フルフルデ語の親族名称の内、*deerdirawo* は、父を同じくする兄弟および、平行イトコをしめすが、かれらのあいだでは、年上の人には、*soomoore* を使わなくてはならない。

親族外では、親族内の上下関係の類推がはたらき、親族内にその人をおけば、自分がその人にとってどのような位置にあるかを判断し、*soomoore* を使うかどうかきめる (江口 [1985] 参照)。

## 2.2. 男性と女性

女性は、男性に挨拶をはじめることになっている。けれども、女性が、支配者の妻や母などであるばあいには、男性でもその女性に挨拶をはじめなければならない。

## 2.3. 支配者と非支配者

身分差というのは、伝統的首長などで代表される伝統的支配者 (*sarawta*) と一般者 (*talaka*) の成員どうしがであったら、一般人が、支配階級に挨拶をはじめ。自由人 (*dimo*) とその奴隷 (*maccudo*) のばあいには、奴隷は、主人に挨拶をはじめなければならない。けれども、自分の主人以外の人には、そのかぎりではない。

独立後にできたさまざまなレベルの役所の長なども、一般の人よりもうえにある人とみられており、挨拶をうける側にある。また、商店主、ガレージのもち主、市場の店をもっている人、その他の雇主は、*jaagordo* とよばれ、挨拶をうける側にある。



## 2.4. イスラム教における上下関係

イスラム教は、いくつかのタイトルをつくりだした。王 (*laamdo, laamiido*) は、聖戦をし、イスラム教徒の住む国をつくりあげた人々の末裔であるという意味で、イスラム教徒の庇護者であるので、王は、イスラム教のタイトルであるとも考えられるが、今日、人々は、王を世俗のタイトルとしてみている。

イスラム教徒たちは、各居住地区 (*fattude/pattule*) にモスク (*juulirde*)、コーラン学校をもっているが、この両施設の役職者に敬意をはらう。この役職者とは、モスクで、五回の祈りの時間を知らせる係りの *ladan*、祈りを先導する役目の *liman*、コーラン学校で教鞭をとる *mallum* などである。コーラン学校を卒業した人たちは、一応 *mallum* をよぶことも可能だけれども、教鞭をとっている *mallum* ほどの尊敬をうけることはない。コーラン学校の先生にさらに難しいことを教える教師は、*moodibbo* をよばれ、イスラム教育の頂点にたつ。*moodibbo* は、各王国にいるイスラム法による裁判官 (*alkaali*) をかねることが多い。これらのイスラム教のタイトルをもつ人々は、生徒や、一般の人々の、挨拶をうける側にある。

聖地巡礼を済ませた人 (男性は、*alhaji*、女性は、*hajja*) は、まだメッカに巡礼にっていない人たちから挨拶をうけることになっている。足でメッカにやってきた人々は、たいへん尊敬されていて、男女とも挨拶をうける側にある。けれども、最近、航空機で簡単にメッカ参りをした人は、あまり尊敬されていないので、その肩書きは、無視される傾向にある。

## 2.5. 貧富の差

富んだ人々は、財産のない一般の人々の挨拶をうける。挨拶をさきにされたものは、挨拶をした人よりも金持ちとみなされているわけだから、挨拶をはじめた人に喜捨 (*sadaka*) をすることが期待されている。しばしば、貧しい人は、富んでいる人が、施しものをしてくれるまで、その人のまえを離れない。こうして、富は、豊かな人から、貧しい人のところに流れる。貧しい人が自分より上位にいる人のところに行ってそこで、じっとはべっていることをフルベ族は、*faadaago* とよぶ。富者が貧者に施しものをしていないことは、恥ずかしいこと (*cemtufum*) とされる。しかしながら、同時に無制限に人からの喜捨をうけることは、恥ずかしいこととされる。

商人は、自分の客にたいし、挨拶をはじめ。客が商人に率先して挨拶した場合には、商人はその客に値引きをすることが期待されている。

自分とおなじくらいの社会的地位にある人は、自分から率先して、挨拶を開始するか、挨拶をうける側にたつかを決定する。相手からの恩恵を期待するばあいには、率先して挨拶をすべきである。恩恵をあたえるのがやっかいなばあいには、下手にでるといわけである。

人々にお世辞をいって、生計をたてている、職業的芸人 (bammaado/wamm-baaŋe) たちは、ほとんどのばあい、挨拶を率先しておこない、相手に、下手にでる機会をあたえない。こうしてかれらは、報酬を手にいれる。

## 2.6. 現地の人と外来者

一般的に、外来者 (kodo/hodŋe) は、現地の人々には、敬意をあらうことになっている。外来者は、訪問先の長、有力者などのところを訪問し、挨拶することが、期待されている。この訪問者が、めだって上位にあるばあいは、地元のものが、挨拶にくるのが、原則である。

## 3. どこで挨拶をするか

挨拶は、どんな場所でも可能であるが、挨拶のおこなわれる場所のうち、もっとも大切な次の四カ所についてのべておこう。

### 3.1. 「門前 (yolnde)」

yolnde とは、屋敷の入り口で、普通、道路に面したところで、フルベ族の屋敷には、門はないが、これは、いわば、「門前」ともいえる場所であり、挨拶をかわす重要な場所となる。

フルベ族の男たちは、とくに屋敷内に用のないばあい、自分の、あるいは、近所の屋敷の yolnde にすわったり、横になったりして、時をすごす。多くの人々は、そこで夕食をともにする。同様に、伝統的首長も、臣下とともに、王宮のまへの yolnde にすわって、時をすごす。商人たちも客のないとき、店の外ないしは、はいったところに、椅子などをおいてすわっている。これも、yolnde にちかい場所であるといえる。

職人の多くは、yolnde もしくは、yolnde につくられた、日覆い (danki) で仕事をする。

イスラム教のコーラン学校の先生たちのほとんどは、この yolnde で学生、生徒た

ちに教える。もっとも、yolndeに場所がない先生たちは、入り口の間(zawleeru)で、教鞭をとる。

一般に、訪問者が他人の屋敷(saare)をおとずれるとき、入り口(yolnde)で、履きものをとることが多い。たとえ、相手の屋敷のなかにはいっても、もうすこしで面会する人の目にとまるまえあたりに、履きものをぬぐ。相手の居室(suudu)のなかにはいるときには、むろんかならず、履きものをとらなくてはならない。履きものは、履きものの先端を家の内部にむけた形でぬぎおかれる。

### 3.2. 出入口の小屋(zawleeru)

zawleeruとは、屋敷の入り口にある小屋のことで、重要な空間である。ふつう、屋敷の出入りは、ここからおこなわれる。zawleeruは、雨が降ったり、太陽の日差しがきつときの、休息場所でもある。また、zawleeruは、外部からやってきた人の接客空間でもある。旅人あるいは、見知らぬ人、あるいは、疎遠な人がやってきたとき、主人がyolndeにいるなら、まずは、そこで、簡単な挨拶をし、zawleeruに相手を導き入れ、もう一度挨拶をしない。

一家の主(jawmu saare)が、屋敷の奥にいるばあい、訪問者は、zawleeruの外で、来意をつける。一家の主人は、相手をzawleeruに引き入れ、挨拶をかわす。

### 3.3. 日除け(danki)

屋敷の中心部には、普通、dankiとよばれる、日除けがつくられており、この日除け部分には、飲み水のはいった、瓶などもおかれている。一家の者にとってかなり親しみをもたれている人は、yolndeから、来意をつけ、あるいは、省略して、このdankiのところまで直接やってくる。そうして、家の者と、来訪者は、dankiで挨拶をする。

### 3.4. 居室(suudu)

一般にフルベ族は、主人、その妻は、それぞれ居室をもっており、居室を休息、睡眠の場所だと考えている。

自分にとって親しい同性の人が、やってくると、しばしば、自分の居室まで導き入れ、挨拶をかわす。ただし、一世代離れた者、すなわち、祖父、祖母と孫の関係に相当するようなものの訪問の際は、性の区別は、厳密ではない。

したがって、相手との親しさという観点からみれば、家の周辺では、居室、日除け、

出入口の小屋、「門前」の順に挨拶をする場所がえられるといえる。

## 4. 挨拶の距離と身ぶり

### 4.1. 挨拶する両者の関係の上下

挨拶をする二人のあいだの距離は、身分の差異がおおきければ、おおきいほど長くなる。また、二人の関係の親疎は、その二人のあいだの距離であらわされる。伝統的首長と挨拶するときは、側近のもの以外は、伝統的首長と数メートルの距離をおくのが普通である。身分の差がほとんどないもののあいだでも、握手のあと、数十センチの距離をおいて挨拶する。

親しい人どうしでは、長いあいだあっていないときなど、右前腕を相手の方のうえ、左前腕を相手の腕のしたに回し、抱きあうことがある。

伝統的首長のまえでは、人々は、帽子をぬいで、挨拶をする。ここは、一般の人の挨拶とは違う。一般人どうしの挨拶の際には、帽子をとらなくてよい。

### 4.2. 身ぶりとしぐさ

伝統的首長にことばによる挨拶をするとき、挨拶をする人は、帽子をとり、貫頭衣 (dawrawol, ngapalewol) の袖にあたることを、両腕で抱きかかえるようにし、膝まづき、地面に目をやり、直接、伝統的首長の目をみないようにする。そうして、身体上部を上下にふりながら挨拶する。伝統的首長は、軽く頭をふり挨拶をうける。道ばた、市場など、身分差のないものどうしが、挨拶する場合は、立ったままの姿勢で (dardarnde) 双方向かいあい、相手の顔をみながらおこなわれる。

ゴザ、砂のうえなどでは、正座をくずした形ですわり、挨拶をする。女性が、男性に挨拶するときには、この姿勢で相手の顔をみない。

葬式の挨拶をするときに、まれに、女性は、悔やみをいう人のちかくまでいくと、地面に声をあげながら、両手を地面につき、倒れることがある。

一方が、車のなかにいるときとか、馬に乗って、いそいで通りすぎようとするとき、双方は、肘を90°ほどうえにあげ、もしくは、まっすぐにのぼし、手をふる。

女性が、男性に挨拶するときには、地面に膝をつき、相手の顔をみないようにして、目上のものから順位に、一人一人に挨拶する。

一般に、男は、相手の目のまえで、Assalaamu aleykum というときには、前腕をか

るく90°ほどあげる。男たちは、挨拶のときに、握手をする。握手は、右手でおこなわれる。手は、軽くにぎるだけである。また、握手は、口による祝福がそえられる。女は、よほど親しい人どうしでない、握手をしない。

## 5. 挨拶の言語表現

二者のであいから別れまでの挨拶の言語表現に関係することばとして、フルベ族は、*silminaago*, *barkidingo*, *hoofnugo*, *saango*, *usgo*, *jabbitaago* などとして区別する。この区別とニュアンスについて、以下、説明したい。

挨拶は、1) であい頭から、相手の祝福にいたる、いわば、導入部、2) 儀礼的ニュースの交換（あるいは、確認）、3) 別れの文句、4) 相手の祝福の四つの部分で構成されている。しかしながら、3), 4) は、省略されることがある。1), 2)こそは、挨拶の核心部分ということができる。いずれも、決まりきった表現でできている。

マルアの人々はたいそう速く、いそいで、挨拶をすることで有名である。車の窓から、窓のそとの人に挨拶するばあいがあげられる。そのときの多くは、*Alla hokke jam. Jam jam banndu?*「アッラーが、あなたに平安を与えられますように。健康か？」という形をとるが、これは、1), 2) で構成されている。

マルアのフルベ族は、しばしば、仕事をしている人の横を通りすぎたりすると、もともとカヌリ族のいい方である、*Laalee. Laaleeko mon. Use.* などという。これは、1) のみでなりたっている。

2) の括弧のなかのニュースの確認とは、相手のところに死者などのあるばあい、はじめから相手に平安がないということがわかっている、相手のニュースを確認し、同情や、慰めをあたえることが、期待されていることをしめす。

### 5.1. であい頭から相手の祝福にいたる部分

*Salaamu aleykum* という表現は、相手に敵意がないことをしめすと同時に、相手の平安を祈るわけだから、これは、最善の祝福である。自分の家、町内 (*fattude*)、村などに、訪問者がやってきたばあい、この訪問者には、地元の人、相手を歓迎する (*jabbaago*) のが常である。歓迎する相手が一人のばあいは、*A jabbaama* 一人以上のばあいには、*On njabbaama* という。

この *A jabbaama* のあとに続くのが、であい頭の祝福である。

5.1.1. 「アッサラーム・アレイクム」

北カメルーンのフルベ族は、イスラム教徒である。原則的には、イスラム教徒とイスラム教徒とがであう、あるいは、訪問する、また、別れ際に、(As)salaam(u) aleykum すなわち、「汝らに平安あれ」という（これは、silminaago という）<sup>3)</sup>。しかしながら、これは、大変かしこまったいい方で、訪問以外のばあい、省略されることもある。イスラム学者は、アッサラーム・アレイクムを、フルフルデ語で、Jam tabitit dow moodon と訳す。この aleykum というのが、「汝ら」という複数形になっているけれども、相手が一人のばあいでも、この形を使用する。フルベ族のイスラム学者にいわせると、

Koo a tammi a don nder saare feere maa boo, ngam malaa'ika'en wonbe nder saare kooftaama bee "Salaam aleekum." Ginnaaji juulfi don, malaa'ika'en don. Ngol juulataa kam Sheydaan wi'ete.

おまえがたった一人で、屋敷内にいるとしても、何人かの精霊もいっしょに（屋敷のなか）にいるわけだから、「サラーム・アレイクム」といったら、かれらにも挨拶したことになる。（屋敷のなかには、）イスラム教徒の精霊も、天使もいるわけだ。イスラム教徒でない精霊は、サタンといわれる。

だから、目にみえる人というのは、たとえ一人であっても、その人のそばに多くの目にみえない、精霊（ginnawol/ginnaaji）がいっしょにいることがあるので、その精霊のことも計算にいれて、「汝ら」といわれるというわけだ。

この (As)salaam(u) aleykum(または、そのヴァリエントの salaam aleekum)には、通常 Wa'aleykumu-ssalaam(u) もしくは、そのヴァリエントの wa-aleekum salaam, 「平安、汝らに」と答える。なかには、Aleykumu-ssalaam rahmatullaahi wa-barkaatuahu すなわち、「汝らに、あわれみ深いアッラーの平安と祝福あれ」と答える人がいるが、これは、たいへんまれな例である。おなじく、まれに、男性にたいする答え方として、Aleyka-ssalaam, 女性にたいして Aleyki-ssalaam, といういい方がある。いずれも、フルフルデ語では、Jam tabitit dow maafa「汝に平安あらんことを」という意味である。前述の精霊の存在を考えると、矛盾するが、そこには、目にみえる人のみに返答しようとする多少の合理的な考え方が読みとれる。

3) イスラム教徒どうしのあいだで、平安 (salaam) をもって挨拶をかわすことは、コーランの10章11節、51章26節にみられる。

5.1.2. 相手に接近するときの「アッサラーム・アレイクム」

普通、伝統的な家族では、大人も、子どもも、他家を訪問するときに、「門前」(yolnde)で、(As)salaam(u) aleykumとおおきな声をあげることを教える。しかしながら、今日、かれらが嘆いているのであるが、子どものなかには、他家を訪問するときに、この常識的な挨拶のことはをいわないものがある。これは、伝統的な考えからすると、たいへん非常識、非礼(ladabu woodaa)になる。ついでながら、訪問者が、Aleykumu-salaam(u)という返答をうけ、「ちか寄れ(War gaa'e, gaa'e naa)」といわれると、屋敷のなかにはいる。(As)salaam(u) aleykumよりくだけたいい方として、「許されたし(gaafara)」というのがある。婦人もしくは、子どもたちが、だれかの屋敷や、小屋にはいるときに用いる。男性が、使うときには、これは、ハウサ族的であると考えられている。

かなり、親しい間柄の人は、屋敷にはいるとき、なにもいわずに、あるいは、手を打ち、相手のいる場所にちかづくこと、相手にきこえるように、「参ります(mi don wara)」という。黙ったまま、相手のところまでいくことはない。

人々は、この訪問者の声でもって、その人を同定する。もしも、その声の主が、同定できないときには、「それは、だれ(Dum moye?)」とたずねる。それにたいし、訪問者は、「わたしは、生きているものだ(Min guuroowo)」と答えることになっている。そのようなときは、普通、家人が屋敷の入り口までむく。そして、家人は、入り口の間(jawleeru)で、訪問者に対応する。

遠来の訪問者には、水をさしだしたり、ゴザをしいてやり、枕をもってくる。訪問者と訪問されるものとの関係によるが、敬意や親しさなどをあらわすために、羊、鶏などを訪問者への歓迎のしるし(ja66aama)として屠殺することもある。

もの乞い(toroowo)の多くは、各屋敷をたずね歩き、もの乞いをするが、お決まりの(As)salaam(u) aleykum, gaafaraなどはいわない。かれらは、もの乞いの歌をうたうので、その正体を同定することができる。

コーラン学校からやってくる子どものもの乞い(pukaraajo/pukara'en)は、Baraaji Allaもしくは、Alaaro!とおおきな声をあげるのもそれとわかる。そのため、かれらは、alaaro(多分これは、カヌリ語のAla-ro「アッラーに」からきているとおもわれる)、もしくは、alanankaaro、とよばれる。

イスラム教の教師によると、「Baraaji Alla」というのは、次の意味をもつ。

“Hokkam, ke6aa baraaji her Allaa” woni nder man. Allaa hokkite 6ura ko ndok-kudaa mo.

「わたしに施しものをしてください。そして、アッラーからこれ以上の報い (baraaji) を受けてください」アッラーは、あなたがわたしにくださったものよりいいものをお渡しくださるでしょう。

### 5.1.3. 仕事をしている人に接近するときのことば

はじめから訪問の意図なくして、道ばた、畑などで、労働をしている人であった場合、アッサラーム・アレイクムなどとはいわず、道ゆく人は、相手に、use あるいは、laalee などと、カヌリ語起源のことばでねぎらいの挨拶をする。Noye kuugal? 「仕事はどうか?」ときくのは、まずは、相手を、use あるいは、laalee などのことばで、ねぎらってからである。

### 5.1.4. であい頭の祝福

#### 5.1.4.1. 祝福

祝福は、barka とよばれる。祝福することは、barkidingo という。

両方が、おなじくらしいの社会的地位にあると、しばしば、祝福には、祝福でもって答えられる<sup>4)</sup>。

相手を祝福すること (barkidingo) の反対は、相手を呪うこと (hudgo) と考えてよい。フルベ族は、熱心なイスラム教徒であり、祝福にしる、呪いにしる、そのような、行為の主人公は、アッラーのみである。たとえば、Alla hokke saa'a 「アッラーが、好運をあなたに、あたえますように」とか、Alla naalu mo 「アッラーがあの人を呪われますように」。このいわば祈りは、すべて、アッラーを主語とし、動詞の語根は、-u もしくは、ゼロ、-o もしくは、ゼロの接尾辞をとる。

祝福のうちで、もっとも基本的なものは、jam もしくは、njamu である<sup>5)</sup>。両者の

4) 先生と生徒の父との挨拶のゴムベ (Gombe) 方言の例がある。生徒の父が、Alla reene 「アッラーが守られますように」といえば、先生が、Alla seyne 「アッラーが、幸せにしてくださいますように」で答えるという形が、設定されている [ARNOTT 1971]。

5) jam は、ウォロフ語の jamm 「平安、平静」と密接な関係にあると考えたい。すなわち、jamm [jam:] 'tranquillité de l'âme'。ウォロフ語の挨拶でもっとも簡単で、もっともよく使われているのは、

Jamm ngaam (相手が単数の場合)

Jamm ngeenam (相手が複数の場合) [C.L.A.D. 1977: 201]

フルベ族が、ウォロフ族と共住しているときに、おそらくこのことばを、ながいあいだ共用し、かれらが、東に移動したあとも、これを使用し続けていると考えてよいのではないだろうか。

ついでながら、このjam は、フルベ族の住んでいるところどこでも、きけるけれど、体の様子などに関して、フータ・ジャロン、フータ・トーロ、マーシーナ、ブルキナ・ファソ、ニジェールの一部、トーゴなどニジェール川の西の地域では、「体が、健康であること」を、動詞 sella で示す。たとえば、A sellii? 「おまえは、健康か?」、Mi sellaa 「わたしは、健康ではない」。



差について、ある、インフォーマントによると、

“Alla hokkee njamu” bee “Alla hokkee jam” fuu fotan. ‘Doo kam kalima gootel wurti mo (＜フランス語 mot) didi.

「アッラーがあなたに、njamu をあたえますように」と、「アッラーが、jam をあたえられますように」は、どちらもおなじ。両方ともおなじ単語からきている。

フルベ族がイスラム化するまえには、Alla hokkee jam という挨拶表現がなかったことが、想像される。これは、アラビア語の表現をフルフルデ語におきかえたに違いない。イスラム学者によると、

“Alla hokkee jam” bee “Salaam aleekum” kam gootel. “Salaam aleekum” kam “Jam tabitit dow moodon.”

「アッラーが、jam あなたにをあたえられますように」というのと「サラーム・アレイクム」というのは、おなじこと。サラーム・アレイクムは、「jam が、あなたがたのうえにありますように」という意味である。

しかしながら、イスラム化以前でも jam という考え方があり、のちに、salaamu を jam として、解釈するようになったと考えてよいのではないだろうか。

すべての祝福のことばには、Aamiina 「アーメン」、あるいは、Alla humma aamiin, Alla jaabo 「アッラーがお答えになるように」と答えることになっている。なお、前者は、アラビア語であるが、後者は、前者の訳である。Aamiina の意味は、「アッラーが、(あなたの祝福に) 答えられますように」という意味であるとされる。

身分のうえの人にたいする祝福には、Barkaa ma 「あなたの祝福」ということばをつけくわえる。

しかしながら、たいていの人には、この Alla hokkee jam にたいして、Aamiina とは、いわない。なかには、Usoko (あるいは、Useko) 「ありがとう」と答える人がいる。伝統的首長は、臣下の祝福には、Usoko ということになっている。

#### 5.1.4.2. であい頭の祝福の例

以下頻繁に使われる祝福の例をあげておこう。

Alla barkidine<sup>6)</sup>.

「アッラーが、あなたを祝福しますように」

6) イスラム学者によると、この表現は、アラビア語の Baarka llaahu に対応しているといわれる。

**Alla ende<sup>7)</sup>.**

「アッラーが、あなたのめんどろをみてくださいますように」

**Alla faḅḅine.**

「アッラーが、あなたを長くたもたれんことを」

**Alla hokke.**

「アッラーが、あなたにあたえられんことを」

**Alla hokke sabbungo.**

「アッラーが、あなたに長寿をさずけたまわんことを」

**Alla hoynane.**

「アッラーが、あなたを楽にしてくださらんことを」

**Alla humtu muuyo maada.**

「アッラーが、あなたの願いをきいてくださいますように」

**Alla jaabo do'a maada.**

「アッラーが、あなたの祈りに答られんことを」

**Alla juttin balde maada.**

「アッラーが、あなたの齢を長からしめんことを」

**Alla reene<sup>8)</sup>.**

「アッラーが、あなたを守りたまわんことを」

**Alla sabbinane.**

7) この end- についてイスラム教師によると、次のように説明される。

Ko wi'ete endam kam a don ayni goddo, nyaam (nyaamndu) maako, yar (njaram) maako, dum ko o bornoto, njamu maako, fuu, a don ayni, kanjum woni a endi mo. Aynugo dum hakkilango. Kosam wi'ete endam. Ngam daada don musina binngel mum haa ngel mawna. Kanko on hokkata ngel ko ngel nyaama har kosam man. Kanko yiwata ngel. Kanko we'itanta ngel ngel waalo. Kanko wadanta koo dume fuu. Daada buran koo dume fuu endugo.

endam (end- の名詞形) とは、人がだれかのことを気にかけることである。食べもの、飲みもの、その人のきるもの、などのことを気にかけることである。それが、end- することなのだ。気にかけるとは、注意することである。乳は、endam といわれる。なぜなら、母親は、子どもを育てるために、子どもに乳をのます。母親は、その乳でもって、子どもの食べるものをあたえるというわけだ。母親は、子どもを洗ってやるし、子どもの寝床をつくってやるし。子どものありとあらゆることをしてやる。母親は、end- ということではだれにもまさる。

8) この表現には、次の説明がされる。

Alla reene e sarri. Sarri kam ko zammbete. Ko latti kalludum kam naa fuu naa kanjum woni sarri? Sarruwol ngol, sarriji di. Alla reene, dum Alla ayne, malla, Alla hisne. これは、アッラーが sarri から、あなたを守ってくださいますようにということなのだ。sarri とは、おまえの邪魔をするもののこと。わるい結果を招くものごとはすべて、sarri なのではないか？ sarri は、sarri からきており、sarruwol という形をとる、その複数形は、sarriji である。これは、いいかえれば、Alla ayne または、Alla hisne である。

「アッラーが、あなたを長寿にいたらしめんことを」

Alla seyne.

「アッラーが、あなたをよろこばせたまわんことを」

Alla suddee asirri<sup>9)</sup>. または, Alla suurree.

「アッラーが、あなたの秘密を守りたまわんことを」

Alla walle.

「アッラーが、あなたを助けられますように」

Alla warje hayru.

「アッラーが、あなたに幸せでもって報いられんことを」

Alla woonane<sup>10)</sup>.

「アッラーが、あなたによいことをされますように」

Alla yamdine.

「アッラーが、あなたに平安にたもたせたまわんことを」

Alla yette.

「アッラーが、あなたを褒めたまわんことを」

#### 5.1.4.3. 文学的祝福

文学的表現ではあるが、ディアマレ地方のフルベ族のこのむ、ムボーク詩 (mbooku) のなかに次のような表現があらわれる。この祝福は、主唱者が、観客のなかの特定の人にむかって、「ご挨拶もうしあげる」ということばとともに、発せられるもので、行末の四音節は、短長長短の韻律をもつ。

Alla hokke duubi dutal gorgal.

「アッラーがあなたに、雄ワシの齢ほどの長寿をあたえたまわんことを」

Alla ardore gal woodfi.

9) これについての説明は次のようになされる。

Ko wi'ete suddaaگو asirri kam, konneji maa fuu tata yi'anee ko halli her maada, tata laara ayiibe maa. To yimbe anndaa ayiibe maa, naa asirri man doo suddi? "Alla suddee asirri", bee Aarabre kam, "Shatara kallaahu." Waatoo, taa be ndaara sirri maa, taa be cementee woni.

Suddaaگو asirri とは、敵が決しておまえの都合の悪いことをみないように、おまえの弱点をみないようにということである。人が、おまえの弱点をみないなら、おまえの秘密は、守られているではないか？ この表現は、アラビア語では、Shatara kallaahu. すなわち、人が、おまえの秘密をみて、おまえを辱めないようにということなのだ。

10) これは、次のように解釈される。

Alla hokke ko burata woodgo.

アッラーが、よりよいものをあなたにあたえられんことを。  
すなわち、この woonane は、\*woodnane と解釈されている。

「アッラーがあなたをよい方に、導きたまわんことを」

**Alla Ceniido mawnin maa.**

「聖なるアッラーが、あなたを育てたまわんことを」

**Alla nii njamu maa duura.**

「アッラーにより、あなたの平安長からんことを」

**Alla yottine numo maada.**

「アッラーがあなたの想いを実現させたまわんことを」

**Alla woonane juut balde.**

「アッラーが、あなたによいことをしてくださり、命を長らえさせたまわんことを」

## 5.2. 儀礼的ニュースの交換

ニュースの交換とは、一言でいえば、相手の平安をたずねることである。儀礼的というのは、実際の状況とは、関係なく、相手の間にたいして、紋切り型の答をかわすことをいう。実際のニュースの交換は、決まりきった挨拶のあとでおこなう。儀礼的ニュースの交換に対応することばは、*koofngol/koofli*, *caangal/caale* という。それぞれ、*hoofna, saana* という動詞からきている。*hoofna, saana* は、挨拶をする、敬意をあらわすようなニューアンスがある。フルベ族のインフォーマントによると、

**Ko wi'ete "Mi saani ma" naa a yami njamu maako.**

「わたしは、あなたにご挨拶 (*saana*) をもうしあげます」というのは、その人が、平安か (*njamu*) どうかをたずねることなのだ。

また、

**Koofngol bee caangal dum huunde woore. Kunndude demde on cenndi. Kunn-dude, demde on latti feere feere.**

**Gal ko dillani fommbina Kamerun, nanngi diga Garwa haa dilli Ngawndere doo, be mbi'an: "Mi hoofni maa."**

**Yoo, lesdi Jama'aare boo be mbi'an: "Mi saani maa." "Saananam wayne", doo kam lesdi Jama'aare.**

*koofngol* と *caangal* とはおなじこと。いい方がちがうだけである。いいあらわし方が、ちがうだけである。

カメルーンの西側、すなわち、ガルアから、ガウンデレのほうでは、人々は、

Mi hoofni ma. という。

ディアマレ地方では、Mi saani maa. という。Saananam wayne「だれかに、挨拶 (saana) しておくれ」というのは、ディアマレ地方のいい方だ。

しかしながら、hoofna, saana の用途はちがう。しばしば、ディアマレ地方では、死者のでた家に出かけて、挨拶し、お悔やみをいう場合は、saana を使う。あるイスラム教の教師のインフォーマントによると、この用法まちがっているという。これは、イスラム教の聖戦の中心地であったナイジェリアのソコト方言が、今日でも、コーラン学校のアラビア・フルフルデ語の翻訳などにも使用されており、その影響によるものかもしれない<sup>11)</sup>。

To wayne wi'i: "Wayne maayi, mi dilli saanoygo", kanjum kam bilkaare. "Mi dilli hoofnoygo" har amin kam maayraado. "Mi dilli saanugo" boo caanngal boo jamo. Hoofnugo kam maayraado.

もしもだれかが、「だれかが死んだ。挨拶 (saanoygo) にいってくる」というならば、それは、無知によるものである。わたしたちは、「挨拶にいって (hoofnoygo) くる」という。「挨拶 (saanugo) にいってくる」というのは、健常者の挨拶である。挨拶する (hoofnugo) は、死なれたものにするものだ。

saana は、ハウサ語圏に住むフルベ族によって広く使われることから、おそらく、ハウサ族の sannu という挨拶ことばからきていると考えられる。

ある、インフォーマントによると、

"Mi saani maa" bee "Sannu" kam gootel.

「わたしは、挨拶 (saana) をもうしあげます」というのと「こんにちは (Sannu)」というのはおなじこと。

saana も hoofna も、ことばをもちて、挨拶することである。しばしば、時間がながい、挨拶をしたいときには、Mi saani ma「わたしは、あなたに御挨拶もうしあげる」という。だれかに、自分の挨拶を伝えたいときには、西方方言のはなし手には、

11) アダマワ地方では、お悔やみを foofugo という。動詞 foofugo には、名詞形はない。

foofugo は、フルフルデ語の西方方言のうち、ニジェールよりのマリ、ニジェールの西方、ブルキナ・ファソ、北部トーゴの一部で使われる、fofo という挨拶ことばからきている。

西方のフルベ族の人々のなかには、これは、「息をする、生きている」という動詞、foofa の命令形 foofu からきていると考えている人もいる。

しかしながら、この fofo ということばは、ソンガイ・セルマ族によっても使われる。この fofo というのを、日常的な挨拶ことばとして使用する人々は、すべて、ソンガイ・セルマ文化圏に住んでいることから考えると、ソンガイ・セルマ語からの借用と考えるのが、自然だろう。

Hoofnanam また, Saananam 「わたしのかわりに挨拶しておいてほしい」, すなわち, 「よろしくおつたえください」という。しかしながら, 今日, 東方方言地域でも, 西方方言地域からの人口流入により, hofnanam (<hoofnanam) という表現をきくことができる。

フルベ族の儀礼的ニュースの交換部の, いわば, キーワードは, jam といえる。この jam は, 頻繁に無変化で用いられることである。たとえば,

Jam waali? 「おまえは, 無事に夜をすごしたのか?」<sup>12)</sup>

Jam banndu na? 「おまえの体は, 元気か?」

この無変化の形にたいし, jam を変化させて使用することがある。これは, 無変化形の後にでてきたものと考えられる。すなわち, この jam の語頭子音は, {y~nj~j} と変化し, 接尾辞とともに活用される。たとえば,

A jam-o? 「おまえは, 元気か?」

Yimbe maa yam-be? 「あなたの家族は, 平安か?」

Saare maa yam-re? 「おまえの屋敷 (=家族) は, 元気か?」

Bikkon maa njam-on? 「あなたの子どもたちは, 元気か?」

いずれにしろ, 一言でいえば相手の平安無事, すなわち, jam を問いたたすことなのだ。もっともみじかいいい方では, Jam na? という表現をするが, これは, 挨拶のエッセンスともいえるものである。伝統的いい方では, 次のような表現をとる<sup>13)</sup>。

Jam (ba) sagoo maafa? 「あなたの望むように平安無事か?」

Kori jam? 「平安無事であることを望んでいるがどうか?」

これにたいする答は, jam, jam nii 「平安, 無事」であるが, それは, アッラーのおかげであるということ強調するために, Alhamdu lillaahi 「アッラーに感謝しています」ということばをつけくわえる場合がある。

親しい間柄あるいは, 少しは, 冗談の気持ちこめて, Jam woodaa 「平安はない」などという人もいる。しかしながら, 多くの人は, 自分がいったことが, 真実になるのを恐れて, そのようないい方をしない。

12) アーノットによると jam waali の jam は, 動詞の主語であるという [ARNOTT 1971]。

13) フルベ族は, フルベ族の村にあらたにやってきた, フルフルデ語を知らない, 外来者には, 「無知な人の使うフルフルデ語 (bilkiire)」で挨拶をする。これは, ヨーロッパ人などに対してもおなじ態度でのぞむ。Jam を無変化で使うことに特色がある。Jam? Jam jam? 「元気か。元気か?」

なお, 無知な人のフルフルデ語については, 江口 [1971] 参照。

5.2.1. 相手自身、相手の家族、などの平安に関する問い

相手の健康、家族などについての平安をたずねるときに、できるだけ、具体的かつ、直接的な質問は避けられる。たとえば、おまえの妻 (debbō maa) というかわりに、女や女たちを指す曖昧なことばである kore/koreeji, 女たちや子どもたちをしめす rewbe bee bikkon のかわりに、屋敷をしめす saare を使う。

相手が、遠来の客などであると、相手の平安にはじまり、家族、友人、さらに、相手の町内の人全員、村人全員の平安をたずねる。村人全員の平安などというのも、決まり文句の一部である。

村落部では、人の平安をたずねたあと、家畜、畑などのようすをたずねることもある。

なお、挨拶にたいする返事には、否定的な感情をあらわさない。ふつう、これらの質問に jam 「平安」と答えられる。

その極端な例は、病気になっている人は、「わたしは、死にかけ」などとはいわず Mo"ere 「おかげさまで」、あるいは、Mi hebi daama 「わたしは、よくなっている」などという。

相手の平安の問いかけには、次の四つの言い方がされる。

1) 「主語+jam」の形式。

A jama naa? A jama? 「あなたは、元気か？」

Saare maa yamre? 「あなたの家族は、元気か？」

Koreeji<sup>13)</sup> maa jam? 「あなたの女たちは、元気か？」

2) 「Jam+補語 (naa?)」の形式。

Jam banndu (naa)? 「あなたの体は、健康か？」

Jam saare maa (naa)? 「あなたの家庭は、元気か？」

Jam koreeji maa (naa)? 「あなたの女たちは、元気か？」

Jam bikkon maa (naa)? 「あなたの子どもたちは、元気か？」

Jam iyaaluuji maa (naa)? 「あなたの家族は、元気か？」

3) 「To+主語」の形式。

To ardungal? 「一家の主としての仕事は、どうだ？」

To ardanaago hoore mum? 「しっかり仕事ができているか？」

To saare maa? 「あなたの家庭は、どうだ？」

To iyaaluuji maa? 「一族のものたちは、どうだ？」

To koreeji maa? 「あなたの女たちは、どうだ？」

忍耐力の有無をたずねるのもこの形式でなされる。

(A) —Toye munyal? 「忍耐はありますか？」

(B) —Munyal doon. 「忍耐はありますとも」

長いあいだ会っていなかった人には、しばしば、次のようにたずねる。

To wayreego? 「長いことあっていなかったがどうか？」

おそらく、商売にたずさわる人たちの挨拶からでてきたものだろうが、次の表現は、マルア特有のものである。これにたいする答は、doon「ある」、koydum「簡単、やさしい」などである。いずれも、この形式による。

To dawra fista?<sup>14)</sup> 「計画はしたが、頓挫したことはあるか？」

To diida wila? 「(地面に計画を)線として書いたけれど、(うまくいかなかったので)その線をけしてしまったことはあるか？」

To numa hebataa? 「頭で考えたけれど、手にはいらなかったことはあるか？」

To taltaldi<sup>15)</sup> duniya? 「この世の戦いはどうだ？」

To ko endataa? 「世話をしている人たちはどうなっているか？」

To laara acca?<sup>16)</sup> 「みてほしいとおもったけれど、あきらめたものは、あるか？」

To wi'aneego ko wi'aay? 「いってもしないことを、いったなどといわれることはあるか？」

#### 4) 「No+名詞 (あるいは、動詞)」

No banndu maa? 「あなたの体はどうか？」

No comri? 「疲れはどうか？」

No haebre bee kuude? 「しごとはどうなっているか？」

No kuugal? 「しごとはどうか？」

No mba'ataa bee bone duniya? 「この世の苦勞はどうだ？」

14) あるインフォーマントによると、to ko numata humpitake, dawra fisti「考えていることが、うまくいくことを dawra fisti」という。

15) taltaldi duniya は、haebre duniya と考えればよいという。

16) 別のインフォーマントによると、これは、ganyo laara, acca「敵にみられて、敵にあきらめてもらった」という意味であるという。



No ngorrataa? 「どうしているのか？」

フルベ族は、イスラム暦をまもる、断食月 (suumaye) に、断食の様子をたずねることを中心とする。

(A) —Noye suumaye wa'i? 「断食はどんな様子ですか？」

(B) —Koydum. 「苦勞はありません」

### 5.2.2. 時にあわせた挨拶

#### 5.2.2.1. 気候に関する挨拶

カメルーン北部においては、基本的に一年は、雨期 (duumol)、寒期 (dabbunde)、乾期 (ceedu) にわかれる。雨期には、雨が降り、それ以外の季節には雨は降らない。雨期には、湿り気のある、涼しさがあり、これは、peewol とよばれる。寒期には、乾燥した寒さ jaangol がある。雨期にしろ、乾期にしろ、暑さは、そのまま、「太陽」(naange) とよばれるか、「焼けている」(guldum) とよばれる。したがって、天候は、気候によって条件づけられているといえよう。

一年中、暑さについて、Toy naange? 「お日さまはどうか?」、Toy guldum? 「暑さはどうか?」という。

雨期に、Toy peewol? 「湿り気のある寒さはどうか?」という<sup>17)</sup>。

寒期に、Toy jaangol? 「寒さはどうか?」などときく。その返事は、普通、Naange don 「お日さまはある (=暑い)」、Jaangol don 「寒さはある (=寒い)」。

ふざけ半分に、jaangol 「寒さ」をもじって、Toy jaangol, toy jaangerde? 「寒さはどうか? 腹のなかの寒さはどうか (=空腹か?)」という。

#### 5.2.2.2. 時間帯に関する挨拶

フルベ族は、太陽の運行によって一日を大別して、夜 (jemma) と昼 (nyalawma) にわけると。こまかくいえば、夜明け (subaha)、午前中 (beetki)、正午 (caka naange; midi)、日没後、就寝までくらい (hiirngo)、真夜中 (caka jemma) にわけると。また、一日の時間は、五つの祈りの時でもってよぶ。すなわち、夜明けの祈り (fajiri)、昼下がりの祈り (zuura)、夕方の祈り (asiri)、日暮れの祈り (manngariba)、就寝前の祈り (eesaa'i)。

これらの時間の感覚がすべて、かれらの挨拶に反映されているわけではないが、夜

17) また、目ざめるまでに雨が降っているのを知らないで、居室 (suudu) で寝ている人について、訪問者は、abuga といって挨拶をする。そうすると、そう挨拶された人は、abuga といった人に、贈り物をすることになっているという [NOYE 1989: 1]。

と昼、早朝と昼前と午後の区別は、挨拶にあらわれる。とりわけ重要なのは、朝になされる挨拶である。朝の挨拶では、無事に「目がさめたか、夜をすごしたか、起きあがったか」が問題にされ、眠っていることは、死んでいることへのアナロジーがあるため、朝のあいは大切であると考えられている。

一日のあいだ、どの時間帯にも、かれらは、挨拶をするが、日暮れの祈りの時間 (manngariba) には、だれもが、モスクや家の内側にいるか、家にもどるためいそいでいるので、路上でながながと、挨拶する人はいない。

人が挨拶をする少しまえまで、相手が平安無事にすごしたかどうか、問題にされるわけだが、早朝なら, waal-「夜をすごす」, daan-「寝る」, yumm-「起きる」, weet-「早朝をすごす」など、昼前なら, nyall-「午前中をすごす」, 午後 2, 3 時から日没前後なら, hiirt-「午後をすごす」という動詞が使われる。

これには、次の四つのいい方が使われる。

- 1) 「主語+動詞+jam」の形式。この形式にでてくる動詞は、次項でのべる、一日の時間と関わっている。

A waali jam? 「あなたは、平安のうちに夜をすごせたか？」

A hiirti jam? 「あなたは、平安のうちに遅い午後をすごせたか？」

- 2) 「jam+動詞」

Jam waali fini? 「平安のうちに、夜がすぎたか、目ざめたか？」

Jam weeti? 「平安のうちに、早朝がすぎたか？」

Jam nyalli? 「平安のうちに、午前がすぎたか？」

Jam hiirti? 「平安のうちに、午後がすぎたか？」

- 3) 「jam(jam)+動詞+主語」の形式。これは、うえとおなじと考えられているが、習慣的にこの形をとらないものもある。たとえば、On mbaali jam? 「あなたたちは、平安のうちに夜をすごせたか？」 Jam jam mbaalifon? とはいわない。

Jam jam kiirtudaa? 「あなたは、平安のうちに遅い午後ををすごせたか？」

Jam mbeetudon? 「あなたは、平安のうちに早朝をすごせたか？」

Jam nyalludon? 「あなたは、平安のうちに昼をすごせたか？」

- 4) 「No+動詞+二人称」

No mbaaludaa? 「あなたは、どのように夜をすごしたか？」

No mbaaludaa? 「あなたには、昨夜どんなことが起こったか？」

5.2.2.3. 挨拶は、相手のさまざまな状況に応じて、臨機応変におこなわれ、上記のいくつかの形式が、まざりあってあらわれる。たとえば、早朝の挨拶の例は次の通り。

- (A) —A waali jam naa?  
 (B) —Alhamdu lillaahi, mi waali jam.  
 (A) —Jam pindaa naa?  
 (B) —Jam ba ngiddaa.  
 (A) —Jam banndu maa naa?  
 (B) —Jam koodume.  
 (A) —Jam bikkon maa naa?  
 (B) —Jam koodume.  
 (A) —Jam rewbe maa naa?  
 (B) —Jam.  
 (A) —Jam saare maa koo dume? Kori en yummodii?  
 (B) —Ooho, jam koo dume. Walaa kesum.  
 (A) —Kori a daani booddum?  
 (B) —Mi daaniido.  
  
 (A) —あなたは、平安のうちに夜をすごせたか？  
 (B) —おかげさまで、わたしは、平安のうちに夜をすごせました。  
 (A) —あなたは、平安のうちに目をさましたか？  
 (B) —のぞみのとおり平安無事です。  
 (A) —あなたの体は、元気か？  
 (B) —まったく平安無事です。  
 (A) —あなたの子どもたちは、元気か？  
 (B) —別になにも問題はありません。  
 (A) —あなたの妻たちは、元気か？  
 (B) —元気です。  
 (A) —あなたの家庭は、無事か？ おたがい、起きあがれたか？  
 (B) —はい、まったく平安無事です。かわったことはありません。  
 (A) —よく眠れたか？  
 (B) —眠れました。

#### 5.2.2.4. 死者のでた家族へのなぐさめの挨拶

男性は、人まえで泣かないけれど、女性の訪問者は、相手の屋敷にはいると相手にきこえるように、泣きごえをあげる。訪問者は、次のようなことをいう。いわば、相手のニュースの確認といえるものである。訪問者が、男性の場合、相手と握手をすることが多い。

Asee, wayne goo maayi. Wayne ardake. Duniya nonnon, wafan. Naa non duniya kam? Ayyee. Sannu. Sannu. On caanaama. On koofnaama e maa-jum. Alla yaafano en mo.

だれだれさんが、亡くなられたそうですね。だれだれさんは、先立たれました。この世はそんなものです。この世はそんなものです。なるほど。ご挨拶もうしあげます。みなさんにご挨拶もうしあげます。亡くなられた方のためにご挨拶もうしあげます。アッラーがわれわれのために、あの方を許されますように。

挨拶を受けた人は、次のようなことばをかえす。

Usoko. Usoko. Usoko. Usoko. A hooci baraaaji. A hebi baraaaji.

ありがとう。ありがとう。ありがとう。ありがとう。あなたは、アッラーの恵みをうけられるでしょう。あなたは、アッラーの恵みを手にいれられるでしょう。

#### 5.2.2.5. 病気見舞いの挨拶

だれかが、病気であることをきけば、人々は、見舞いにでかける。訪問者は、相手が重病であっても、相手の様子をたずねる形式をとる。たとえば、

Sannu. Noye banndu maa wa'i? Noye mba'daa? Kori bee daama? A don heba daano? Kori nii?

ご挨拶もうしあげます。あなたの体の具合は？ どうですか？ よくなっていますか？ 眠れますか？ どうですか？

見舞いをうけた人は、病状のいかんを問わず、たいへん肯定的な答をかえすことになっている。しばしば、病人は、そのような希望的な答のあと、死んでしまうことがある。たとえば、

Alhamdu lillaahi. Daama. Bee daama Nyawu man hoyni. Koydum.

アッラーを賛美します。よくなっています。よくなっています。病気は、軽くなっています。問題はありません。

病気であった人が、よくなって歩けるようになると、人は、次のようにいう。

A bangtake naa?

起きあがれるようになりましたか？

5.2.2.6. 相手への同情や、なぐさめには、次のようなことばが使われる

Alla hoynane. 「アッラーが、あなたのために（苦労を）軽減してくださいませように」

Alla hoynu. 「アッラーが、（苦労を）軽減してくださいませように」

5.3. 別れの文句

挨拶をかわしたあと、辞意をのべる (jaḅḅitaago)。しばしば、「わたしは、あなたにいとまごいをいたします (Mi jaḅḅitake maa)」といったあと、次のようにいわれる。

mi dilli 「わたしは、いく」

mi huuci 「わたしは、かえる」

mi hooti 「わたしは、かえる」

ただし、この mi huuci といういい方は、マルア周辺でしか使われない。mi hooti は、西方方言において広く使われる。

5.4. 別れ際の相手の祝福

相手が、辞意をのべると、それにたいし、おたがいがおたがい祝福しあう。

Alla hokku en jam. 「アッラーが、われわれに平安を与えられんことを」

Alla hawtu en nder jam. 「アッラーがわれわれを平安のうちに再会させてくださるように」

Alla yaaru yonki. 「アッラーが、（再会のときまで）命を長らえたまわんことを」

Alla doftu kosce maa. 「アッラーが、あなたとともに（くあなたの両足のお供をされんことを）」

Alla yottine jam. 「アッラーが、あなたを無事につかされたまわんことを」

Alla tumbe cake bikkon maa jam. 「アッラーがあなたを、無事にあなたの子どもの真んなかにおかれますように」

Alla wartire jam. 「アッラーが、あなたを無事にもどさせたまわんことを」

Alla tawne yimbe maa jam. 「アッラーがあなたに、あなたの家族を無事あわせ

たまわんことを」

相手が、乗りもののにのるときには、

Njippaa jam. 「あなたが平安のうちに着きますように」

相手と午前中に別れるときには、

Alla nyallin jam. 「アッラーが、午前中を無事すごさせたまわんことを」

相手と夜に別れるときには、次のようにいう。

Alla hokku en waalugo jam. 「アッラーが、安らげき夜をあたえたまわんことを」

Jam waala. 「安らげき夜を」

Mbaalen nder jam. 「安らかに、休もう」

Alla finndin en jam. 「アッラーが、われわれを平安のうちに目ざめさせてくださるように」

なお、離別のとき、次の面会を確かめあうときには、次のような、表現を使う。

Sey ni seeda. 「すこしたったら」

(Too,) sey yeeso. 「(それでは) 次のときまで」

Sey fajiri. 「明朝まで」

Sey janngo. 「あすまで」

Sey to Alla hawti en. 「アッラーが、われわれをあわせたまうまで」

Sey mawri. 「来年まで」

## 6. 挨拶表現のことば遊び

親しいものどうしが、挨拶表現をもじったことば遊びをすることがある。このような遊びは、1980年代から街でできるようになった。たとえば、Noye a doon? 「おまえは、生きてるか?」という、問いにたいし、Mi doon 「わたしは、生きています」と答えるかわりに、Mi doom 「わたしは、乾燥している (= 貧乏でお金がない)」という。通常 Alla sabbinane 「アッラーが、あなたを長寿にいたらしめたまわんことを」にたいし、Alla cabbi name 「アッラーが、棍棒でおまえを粉々にされんことを」、また、Alla hokke jam 「アッラーがあなたに平安をあたえられんことを」というところを、Alla hokke jamde e jiiba. Alla hadee jamde e kosde 「アッラーが、あな

たのポケットに金属(=お金)をあたえたまわんことを。アッラーが、あなたの足に、金属(=足かせ)がつくことをとめられんことを」などという。

いずれの例にも、本来いうべきことばと、ことば遊びの例のあいだには、頭韻の存在がみられる。

## 7. おわりに

以上、カメルーン北部のフルベ族の挨拶の言語表現について記述報告をおこなったが、これでこの研究がおわったわけではない。挨拶の研究を発展させるために、今後の課題を提示しておきたい。

### 7.1. 借用語と異部族との共生

二人のフルベ族がであったときに、であい頭に使う、アッサラーム・アレイクムにしても、*use. laalee*にしても、西方方言の *sannu*にしても、それぞれアラビア語、カヌリ語、ハウサ語からの借用語である。東西両方言圏に住む、フルフルデ語をはなす遊牧民ムボロロ族のなかには、*foo, hoo, fofo, aku* などとあってであいの挨拶をかわす。これらのことばも、他民族からの借用語である。このことは、もともと、フルベ族の挨拶という考え方は、かれらが、そこに居住するために無視できない、他部族との関わりのなかから生まれてきたことをしめす。しかしながら、いつごろから、どこで、このような外来語が定着したかは、今後研究する必要がある。

東方方言圏における *use* の多用は、フルフルデ語におけるカヌリ語からの、農業、住居、食料、商業、社会関係などに関する多数の語彙の借用とともに、カヌリ族との親密、かつ、長期にわたる接触をものがたっている。いままで、カヌリ族とフルベ族との関係に関する研究は、けっして十分でなかったが、この方面の研究がまたれる。

### 7.2. 社会変化と挨拶

19世紀初頭にはじめられたイスラム教の聖戦は、各地にイスラム教と、王政をもたらした。王の住むところには、王の家族を中心とする、「貴族」と平民の階層を生みだした。また、聖戦という名のもとに、奴隷狩りがおこなわれ、フルベ社会に多くの奴隷が流入し、自由人と奴隷、解放奴隷などの差が生まれてきた。聖戦の指導者たちが、すぐれたイスラム教師であったおかげで、各地にモスクやコーラン学校がたてられた。こうして、イスラム教に通じた学のある人と、無学の人との差がでてきた。挨拶

挨拶をだれがはじめるか、また、挨拶表現の内容に、このようなヒエラルキーのある複雑な社会背景をよみとることができる。おそらく、挨拶の通文化的研究をすれば、カメルーン北部のフルベ族の挨拶は、複雑なタイプに属するとおもわれるが、これは、比較以外に手段がない。とりあえず、グーディ [Goody 1972] が、ゴンジャ族 (Gonja) とロダガア族 (LoDagaa) のあいだでやったような、北部カメルーンの非イスラムの他の少数部族との比較研究をしたらよいとおもっている。

今日、交通機関などの発達により、西方方言地域と東方方言地域に双方の人々が、おたがいにいりくんで住むようになってきた。そのため、従来きけなかったような、別の方言による挨拶表現が、予期できなかった場所できけるようになった。独立後、都市化にともなって、リング・フランカとしてのフルフルデ語 (fulfulde bilkiire) をはなす人々が街に住みだした。そのため、今後、東方方言の挨拶の言語表現の単純化が予想される。この研究もまた、宿題の一つである。

マルアの生活は、ディアマレ地方の農業、牧畜を基礎とはするが、その富の多くは、ボルヌ地方との交易によってもたらされる。商人たちによってもたらされる富は、社会の上下関係にもう一つの尺度をもたらした。とりわけ、一方が、他方から、なんらかの恩恵をひきだそうとするときは、旧来の上下関係の無視がみられるということもおこってくる (セネガルのウォロフ族のあいだで類似の報告がある)。これは、贈与論の立場から、アプローチすることもできるが、いつどのようにしてどんな挨拶をはじめるかは、複雑な要素のからみあいできめられる。最近では、この説、フロー・チャートなどを使った、図式化がさかんである [IRVINE 1974; NADEN 1980]。今後このような研究が増えてくることが予想される。

### 7.3. キネシクスの可能性

フルベ族の社会生活の基本的考え方は、フルベらしさ (pulaaku) であり、その構成要素のうち恥を知る心 (semteende)、礼儀正しさ (ladabu) が、形式的挨拶表現、と相手とのあいだに距離をとるという習慣を生みだしていると考えられる。しかしながら、長いあいだあっていなかった親しいものどうしが抱擁するなどは、このフルベらしさなどでは説明できないものである。フルベ族における距離の感覚、身ぶり、姿勢などの挨拶行動のキネシクス (kinesics) は、オーディオ機器を使った研究が適当ではないだろうか。



文 献

- ARNOTT, D. W.  
 1971 The Parent and the Teacher: A Grammatical Analysis of a Fula Text. *Africanische Sprachen und Kulturen—Ein Querschnitt, Hamburger Beiträge zur Afrika-kunde*, Band 14: 48-58, Hamburg: Deutsches Institut für Afrika-Forschung.
- BROWN, P. & S. LEVINSON  
 1978 Universals in Language Usage: Politeness Phenomena. In E. N. Goody (ed.), *Questions and Politeness*, London etc.: Cambridge University Press, pp. 56-289.
- C.L.A.D.  
 1977 *Lexique wolof-français*. Tome 1: A-K, I.F.A.N., Dakar.
- COULMAS, Florian  
 1981 *Conversational Routines*. The Hague, Paris, New York: Mouton Publishers.
- 江口一久  
 1971 「北カメルーンにおける部族語と地域語」『アフリカ部族社会の特色をめぐって』アフリカ社会の比較研究プロジェクト報告No.1 東京:東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 80-89.  
 1985 「フルベ族のうたいものにおける人名—アフリカ」川田順造・柘植元一編『口頭伝承の比較研究2』弘文堂, pp. 107-134.
- FIRTH, Raymond  
 1972 Verbal and Bodily Rituals of Greeting and Parting. In J. S. La Fontaine (ed.), *The Interpretation of Ritual*, London: Tavistock, pp. 1-38.
- GOFFMAN, Erving  
 1967 *Interaction Ritual, Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Anchor Books.
- GOODY, E. N.  
 1972 'Greeting', 'Begging', and the Presentation of Respect. In J. S. La Fontaine (ed.), *The Interpretation of Ritual*, London: Tavistock, pp. 39-72.
- IRVINE, Judith T.  
 1974 Strategies of Status Manipulation in the Wolof Greeting. In Richard Bauman and Joel Sherzer (eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge University Press, pp. 167-191.
- KLINGENHEBEN, August  
 1963 *Die Sprache der Ful*. Hamburg.
- LABATUT, Roger  
 1989 De la salutation peule. In *Graines de parole*, écrits pour Geneviève Calame-Griaule, Paris: CNRS, pp. 65-78.
- LAVER, John  
 1981 Linguistic Routines and Politeness in Greeting and Parting. In Florian Coulmas (ed.), *Conversational Routine*, pp. 289-304.
- MAUSS, Marcel  
 1970 *The Gift*. London: Cohen & West.
- NADEN, Tony  
 1980 How to Greet in Bisa. *Journal of Pragmatics* 4: 137-145, North Holland Publishing Company.
- NOYE, Dominique  
 1974 *Cours de foulfoulde*. Paris: Geuthner.  
 1989 *Dictionnaire foulfoulde-français*. Dialecte peul du Nord-Cameroun, Paris: Geuthner.
- STENNES, Leslie H.  
 1969 *A Reference Grammar of Adamawa Fulani*. African Language Monograph No. 8, African Studies Center, Michigan State University.

江口 カメルーン北部・フルベ族の挨拶の言語表現

TAYLOR, F. W.

1953 *A Fulani Grammar*. London: Oxford University Press.

VERECKE, Catherine

1988 *Pulaaku: Adamawa Fulbe Identity and its Transformations*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.

WESTERMANN, Diedrich

1909 *Handbuch der Ful-Sprache, Worterbuch, Grammatik, Übungen, und Text*. Berlin: Dietrich Reimer.